

名古屋 文化情報

2018
5・6
May / June

No. 380
NAGOYA
Cultural
Information

随想／岡田一彦(俳優) 特集／「コトノハナゴヤ」受賞作
この人と／長谷順二(合唱指導、指揮者)
いとしのサブカル／寺嶋梨里(名古屋渋ビル研究会)



2018

5・6

May / June

Contents

名古屋市民文芸祭 小・中学生の部 受賞作品 …… 2

随想 演劇だって地産地消で。
岡田 一彦(役者) …… 3

「コトノハなごや」受賞作 …… 4

この人と…
長谷 順二(合唱指導、指揮者) …… 6

ピックアップ
本との出会いを演出する図書館の歴史 …… 10

いとしのサブカル
寺嶋 梨里(名古屋渋ビル研究会) …… 11

おしらせ …… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 上野 茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)
- 森本悟郎 (表現研究・批評)
- 山本直子 (編集・出版 有限会社ゆいぽおと代表)
- 吉田明子 (人形劇団むすび座制作部長)
- 米田真理 (朝日大学経営学部教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)

表紙

作品
圏外へ

(2015年/陶、木、塗料/270×270×280cm)

「ゴースト」をテーマに、竪穴式住居の御柱をモチーフに着想しました。いつの時代もまだ見ぬものへの憧憬、遠い未来の誰も知らない場所を目指して、そして、それらを他者と共有するため発信していくのです。



中田 ナオト (なかた なおと)

- 1973年 愛知県岡崎市生まれ
- 2000年 多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻(陶芸領域)修了
- 2011年 アーツチャレンジ2011(愛知芸術文化センター)
- 2016年 中田ナオト 一出会いとひらめきの信楽時間— (滋賀県立陶芸の森陶芸館ギャラリー/滋賀)

naotonakada.jimdo.com

「2017年 名古屋市民文芸祭」
(第六八回名古屋短詩型文学祭) 小・中学生の部
短歌の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆

愛知教育大学附属名古屋小学校3年
野口 愛加
お医者さん人をたすけるかっこいい
あこがれちゃうなわたしもなりたいたい

◆市会議長賞◆

名古屋市立熊の前小学校6年
西口 桃花
あついで中堂々と咲くヒマワリは他の花より
きれいに見える

◆市教育委員会賞◆

名古屋市立若水中学校2年
堀 なみ紀
森の中星空見えて火を囲むこの思い出を
忘れはしない

◆市文化振興事業団賞◆

愛知教育大学附属名古屋小学校4年生
星野 愛花里
火の玉よおちるなおちるなせんこう花火
心がふるえ手につたわった

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆

名古屋市立北山中学校1年
斉藤 絢香
ただいまと重いとびらを押し開けてほうと息はき
リボンをほどく

◆中日賞◆

愛知教育大学附属名古屋小学校3年
上田 侑奈
ちこくだよはしってころんでいたたたた
しかられたよーじごうじとくだ

随想

演劇だって地産地消で。



おかだ かずひこ
岡田 一彦(役者：劇座所属)

名古屋劇塾本科卒業後、研究生を経て劇座団員に。
劇座公演・スタジオ公演のほか外部の公演にも客演するなど、
多数の作品に出演している。

東京の下北沢に行くと大小の劇場やスタジオが集まっていることに感動します。それだけ劇場に足を運ぶ人が多くて「芝居」が日常生活の中で身近に存在するからだと思いました。それはつまり、演劇が多少なりともビジネスとして成立しているということ。なんとも羨ましい限りです。また、文化芸術を発信する劇場には人が集まります。劇場を中心にたくさんの人が集まれば、当然周辺には活気が出てきて、その地域も活性化するはずです。ここに社会に貢献する劇場の存在のあり方がみえます。

名古屋だって劇場の数は負けてないはずですよ！いや、負けてないと思いたい！大手の劇場を始め、各区で小劇場も建てられ、他にも劇団等のスタジオだってあります。そして大規模なホールも改修されると聞いています。

しかしどれだけ劇場が建っても地元で活動する役者がいることをもっと知ってもらわなければいけません。そこで「なごや芝居の広場」という実行委員会が結成されて、“文化小劇場を市民が集う、人が繋がる広場にしよう”とのコンセプトのもと、今年の2月に第一弾として、約50名の地元名古屋で活動する役者たちが集まり、暮しの手帖社の初代編集長・花森安治氏をモデルにした芝居

『暮しの詩』(作=小山内美江子、演出=なかとしお)を創り上げました。名古屋市文化振興事業団の協力を得て、まずは昭和・守山・緑・中村の4館の文化小劇場で上演。それぞれの区に住むたくさんの人たちが足を運んでくださり、「音楽しかやらない劇場だと思っていたが、芝居をやるから観に来た」と言うお客さまの声も聞きました。劇場を変えて上演する試みは一つの成果をあげたと思います。

「劇場とは何か？」それが笑ったり、泣いたり、考えたり、悩んだり、苦しんだり、喜びを感じる場所であるならば、もっとたくさんの人に名古屋で活躍する役者が創る芝居を観てもらいたいと思うのです。

『暮しの詩』はこの6月には北と中川の文化小劇場でも上演されます。また「なごや芝居の広場」は第二弾、第三弾とこの先も続きます。今後も様々な作品が上演される予定です。私たちの芝居が日常生活において豊かな暮しを送るために“絶対に必要なものである”ということを示し続け、そして常に“質の高い芝居を観てもらえる”ように努力を怠ってはならない、といま強く思っています。

文芸による名古屋の魅力発信事業

第1回「コトノハなごや」受賞作

「日常のなごや」の魅力を言葉やアート表現にしていく体験や短編作品応募で参加する「コトノハなごや」が平成29年度にスタートしました。「なごや」を切り取った5枚の写真をもとに、日常での体験や人との交流、風景との出会い、ものへの思い出などの「なごやとわたしの物語」を、エッセイ・小説・詩・短歌・俳句などで表現した168の力作が寄せられました。一次選考で20作品が入選し、その中から最終選考で金賞1、銀賞2、佳作2の5作品が選ばれました。今回は、見事に金賞・銀賞を受賞した3作品をご紹介します。

金賞

〈選んだ写真〉 コメダ珈琲店内

「トーストホール」

里川 渦蓮

幼い頃、早朝に僕と弟の二人だけでコメダ珈琲店へ行ったことがある。喫茶店で朝食なんて、カッコイイと思ったからだ。



写真：秦 義之

メニューを見て、僕は早速帰りたくなった。値段が想像よりも高い。一品頼むだけで、駄菓子がたくさん買えるほどだ。

かと言って、何も頼まずに帰るのは失礼だし、なによりも生まれたてのプライドが許してくれない。僕は仕方なくミックスジュースを頼んだ。弟もミックスジュースを頼んだ。

「以上で」と言うと、店員のおばさんがモーニングサービスを勧めたので、それに従った。餡子がつくやつを二人して選んだ。

支払い後のお小遣いの残りについて確認し、その少なさに落ち込んでいたところでトーストとミックスジュースが届いた。

ミックスジュースは壺のような、変わった容器に入っていて、形の物珍しさから弟と一緒に顔を近づけて容器を眺めた。

観賞魚の入った水槽を眺めるように。

五分ほど経つと弟のお腹が鳴ったので、容器の観察をやめてトーストを齧った。この頃の僕らはパンの耳があまり好きではなかったため、真ん中から食べるのが当たり前だった。

一口齧った後、ミックスジュースを飲んでいると、弟は僕のトーストを奪って自分のと合わせた。合体したトーストは中央部分に空洞ができていた。

「なにしてんの？」

「見てる」

「なにを？」

「大人になった兄ちゃん」

「大人の俺はなにしてんの？」

「笑ってる」

「誰と？」

「わかんない。あ、今謝ってる」

おかしな会話であった。でも、この時は何故かおかしいとは思わなかった。

後日、母も連れて来店をした時も弟は空洞を覗いたが、その時は何も見えなくて、悲しい顔をしていた。

そんな弟を見て、やっとあの空洞から見えた光景が非現実的なものだと僕は気がついたが、今はそれこそが間違いだと僕は思う。

何故なら、僕は目の前でトーストの空洞を覗いている娘の姿に、たった今、笑ってしまったからだ。

銀賞

〈選んだ写真〉 名古屋港の花火

「なかなかやるな」

エヌアール

突然の宣告だった。嫌がる父を連れて診察を受けに行った大学病院で、病状を告げる医師の声は何処か遠くに感じた。そのまま慌ただしく入院させた個室は、見晴らしのいい高層階だった。眼下には鶴舞公園の桜が綺麗に見えた。

「ビルばかりで面白味のない街だと思ってたけど、綺麗な公園もあったな」窓から外を眺めて父がポツンと呟いた。

「面白味がない」、私が父

によく言われた言葉だ。父と違って名古屋生まれの名古屋育ち、生粋のナゴヤっ子の私が市役所に勤めることになった時も、「面白味のないお前が面白味のないナゴヤに勤めるんか」とからかわれた。「面白味がないんじゃないよ、真面目なんだよ、俺も名古屋も……」小さい声で反論はしたものの、何となく弱腰だった。

医師の言葉を守るかのように、父は段々衰弱していっ



写真：岡 広樹

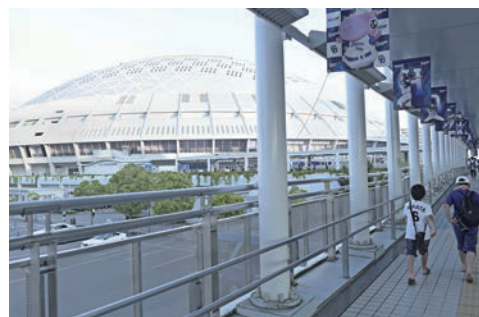
た。痛みもきつくなってきたらしく、夜も上手く眠れないようだった。家族で交代して泊まり込むことにした。ある晩、夜中に急にベッドに起き上がったので、「こんな夜中にどこ行くんだよ、親父」と思わず声を荒らげてしまった。「この窓から飛び降りに行くんだよ」父の好きなブラックなジョークだ。「残念だったね。この窓は開かないよ。俺は仕事で、明日も朝早いんだから寝てくれよ」「相変わらず真面目でつまらない奴だな」父は苦笑いしてそう言った。

暑い日が続いた。モルヒネで痛みが薄れ、父はほとんど眠った状態になった。そんな中、奇跡的に意識が戻った夜があった。ベッドの角度を少しつけると、父はうつすら目を開けて窓から外を眺めた。ちょうど、海の日だった。遠くに花火が上がってるのが良く見えた。何か言いたそうな父の声に耳を傾けると、「ほう、綺麗だ。なかなかやるな、名古屋も」それが、父と交わした、会話らしい最後の言葉になった。最後に名古屋を誉めてくれたのが、何だか、私が褒められたような気になり少し嬉しく、少し泣けた。

「選んだ写真」ナゴヤドーム・ペDESTリアンデッキ
銀賞 「私は知っている」
福耳劇場

もう10年も前のことだ。「せっかく名古屋に住んでいるのだからナゴヤドームに招待するよ！」と、県外に住む両親を中日・巨人戦に誘った。電話口に出た父は、喜んでくれた後なぜか冷静になって「母さんと相談してから返事をするよ」と一度受話器をおろした。その瞬間思い出した。その頃母は右腕の骨折の後遺症で腕が伸びず、人目を気にして生活していたことを。私はそのことを忘れ、観戦者で賑わうナゴヤドームに誘ったのだった。親

孝行の大義名分のもと、そう自己満足のために。後悔した。自分の浅はかさに自己嫌悪に陥った。そんなところに電話が鳴り、「嬉しい、楽しみにしているよ！」と、母の弾んだ声が耳元に届いた。



写真：秦 義之

当日、観戦中の両親は、とても楽しそうだった。どちらが勝ったとか、もはや関係はなかった。さあ帰ろうとドームを後にする。ナゴヤドーム

前矢田駅とを直結する通路は、帰路につく人、人、人であふれ返っている。私は両親を護衛するかのよう前を歩く。も、人の流れには逆らえない。はぐれてしまったかも知れず振り返ると、案の定かなり後方を歩く父と目が合った。私が不安そうな顔をしたのだろう。父は大丈夫だ、と言わんばかりに左手を振った。私はゆるやかに通路の脇に移動し両親を待つことにした。周りの歩調に合わせ、ゆっくりと近づいてくる。あと少しの距離で、人影の狭間に両親の全貌が見えた。父は、守るように左手は母の肩を抱き、右手では母の不憫になった右手をしっかり握っていたのだった。まるでダンスを楽しむ若いカップルのように見えた。私は何だか見ちゃいけないような気がして、合流せずに先へ進んだ。

7年前に父は他界した。ナゴヤドームでの野球中継を実家で観戦すると、母はきまって「帰り、すごい人だったね」と笑顔で話す。そして私は「僕は見ていたよ」と、毎回こころの中でつぶやく。そして、あらためて父の優しさと、母の父への愛の深さを噛みしめるのであった。

授賞式 & 選考委員アフタートーク

「コトノハなごやサロン」

平成29年12月2日(土)に金山南ビル1階イベントスペースにて、入選20作品の中から受賞作品の発表と、選考委員の中村航氏、吉川トリコ氏、武田俊氏による選考のアフタートークを行う「コトノハなごやサロン」を開催いたしました。入選作品の作者の皆様をはじめ、たくさんの方々にご参加いただきました。受賞作品は、「コトノハなごやサロン」当日に発表したため、受賞者の皆様からは歓声や驚きの声がありました。授賞式では河村たかし名古屋市長より、賞状と副賞が手渡されました。また、選考アフタートークでは、選考委員が入選作品を講評し、選考委員への質問もできる貴重な時間となりました。

次回の「コトノハなごや」について

平成29年度に続き、平成30年度も「コトノハなごや」を開催いたします。作品募集に関する事など、詳細は決定次第、公式ウェブサイト (<http://kotonohanagoya.jp/>) で発表いたしますので、ぜひご応募ください。



「コトノハなごやサロン」の様子



この人と...



合唱指導、指揮者

は せ じゅん じ
長谷 順二さん

合唱と共に過ごした半生

長谷順二さんは名古屋市立北高等学校音楽部をピアニストとして全日本合唱コンクールの全国大会に幾度となく導き、同部のOB・OGとともに結成した合唱団ノース・エコーの指揮者として活躍。さらに合唱王国とも呼ばれる愛知県の合唱連盟の理事長として長らく愛知の合唱界を牽引してこられた。今年の3月で理事長を退任されたこの機会に、これまでの活動とご自身の音楽体験を振り返っていただいた。

(聞き手：渡邊 康)

音楽の世界に進むとは思っていなかった幼少期

長谷さんは1950年に香川県西部の三豊郡詫間町（現在の三豊市）の粟島の生まれ。ほどなく同県の東端の大川郡（現在の東かがわ市）に転居する。小学校の教師だった父と、子どもに理解のある優しい母のもとで育った。「歳の離れた兄と姉がいて、三人兄弟の末っ子でした。田舎でしたから、いつも外を元気いっぱい走り回っていました」と幼少期を懐かしそうに語られた。父が音楽教諭ということもあり、家ではいつも音楽が流れていたとのこと。幼少期の環境が後の人生を方向付けしたことがうかがえる。

中学・高校時代が音楽の原点

小学校までは音楽を専門的に習ったことはなかったが、歌が好きであったことから地元の中学校の合唱部に入部した。男子は一人だけで、女子が多い合

唱部を続けることができたのは本当に歌が好きだったからなのだろう。その気持ちは途切れることはなく、音楽を続けるために音楽大学を目指そうとその頃決意した。音楽には日常的に親しみながらも家にピアノがなかったため、学校で練習を重ね、高校に進むまでは本格的な音楽の勉強をしなかったとのことである。

高校に進学するにあたり長谷さんは、音楽コースがあったことから、香川県立坂出高等学校に進学を決めた。坂出高校は香川県のほぼ中央にあったため、実家からは遠くてとても通うことができず、下宿生活を送ることになる。この時も親元を離れて、一人音楽の道に進もうとする息子を「自分のやりたいことをやりなさい」と母が温かく背中を押してくれたという。坂出高校では長谷さんが入学して程無い1967年に音楽科が設置されることとなったが、当時香川県で唯一の音楽課程を備えた高校であった。このほど米寿を記念したコンサートを開催さ

れた、今なお現役で活躍する声楽家の竹内肇先生が熱心に指導されており、東京藝術大学の声楽科にも多くの進学者を出していたことなど、まわりのレベルの高さにも刺激を受け、この高校時代の経験によりさらなる音楽への道が開かれることとなった。歌が好きで中学では合唱に取り組んでいたが、声楽よりもピアノの方が向いているとアドバイスを受けたことが契機となって、ピアノの道を志し本格的にピアノの練習を始めることになった。

愛知県立芸術大学ピアノ科へ進学

その頃の坂出高校からは、関東地区への進学が主流で東京藝術大学をはじめ、武蔵野音楽大学や国立音楽大学に進学する生徒が大多数であったが、1966年に誕生したばかりの公立の芸術大学である愛知県立芸術大学（県芸大）に魅力を感じたことと、



県芸大卒業当時の長谷さん

坂出高校の先輩が県芸大に通っていた安心感もあり進学を決めた。県芸大では、ピアノを専攻し山崎孝、水本雄三、金井裕の各氏に師事した。音楽の道に進み、本格的に勉強をはじめたのは、高校へ入学してからのことであり、幼少期からピアノを習っていた周囲の学生と比べるとやはり経験の少なさは否めず、ピアニストとしての将来には限界を感じることもあったという。しかし、音楽を愛する気持ちを失うことはなかったと長谷さんは語る。

生涯の出会いとノース・エコーの結成



ピアニストとして北高音楽部を支える長谷さん

大学時代の同期生であった、声楽家の谷鈴代さんが名古屋市立北高等学校（北高）の出身だったことが縁となり、北高音楽部が合唱コンクールの上位大会に進出する機会にピアニストを探しているということで誘われて、ピアニストとして関わることになった。そこで音楽部顧問の塩田秋義先生をはじめとする多くの方々に出会うこととなり、その後の合唱活動の大きな出発点となった。北高音楽部はそれまでNHKが主催する全国学校音楽コンクールでは全国大会出場の経験はあったが、全日本合唱コンクールにはこの時初めて県大会から地区大会、そして全国大会に駒を進めることができた。それ以降、毎年のように全国大会に出場するという快挙を成し遂げるようになって、ずっとピアニストとして関わり続け、現役の高校生との交流の中から高校や大学を



中部代表として全国大会へ出場する北高音楽部



第10回 北高音楽部定期発表会

卒業して社会人になっても、一緒に合唱をやっている環境をつくりたいという機運が高まっていった。そうしたなかで生まれたのが、合唱団ノース・エコーである。

合唱団ノース・エコーは創立者であり団長の塩田秋義氏、指揮者の長谷さんを中心に、北高音楽部OB・OGたちが結集し1984年にスタートした。全日本合唱コンクールでは、結成10周年を迎えた1994年について中部大会を突破し、全国大会で銀賞に輝くことになる。それからというもの全国大会の常連となるのは勿論のこと、金賞をはじめ数々の賞を受賞し、さらには結成30周年を記念したCDをリリースするなど、現在も名古屋を代表する合唱団として精力的に活動を続けている。こうして、合唱の愛好家が活動を継続していける場の中心となっている。



全日本合唱コンクール全国大会の常連となった「合唱団ノース・エコー」

なお、北高音楽部のOGの一人に長谷さんの生涯

の伴侶である正子夫人もいらしたのである。正子夫人もノース・エコー結成に参加し、いまでも現役の団員として歌い続けていらっしゃる。北高音楽部、そしてノース・エコーは長谷さんの生涯の出会いをもたらした、かけがえのない存在なのである。

「ノース・エコーの活動を通じて愛知の合唱界をリードしていこうと思っているわけではありません。ただ、自分がいいなと思ったことに取り組んで、それに共感してもらえれば、仲間は自然に増えていくだろうと思っています」と、長らくこの地域の合唱界を牽引してきた長谷さんはあくまで謙虚かつ自然体でそう語られた。



第50回 全日本合唱コンクール全国大会

愛知県合唱連盟理事長に就任

1988年には組織としての合唱活動に興味を持ち、愛知県合唱連盟の理事に就任。1961年に創立された愛知県合唱連盟はアマチュア合唱団や個人の音楽有識者で組織されており、現在加盟合唱団は約200団体、全国でも最大規模を誇る合唱の横断的組織で、各種合唱コンクールを主な活動としている。長年合唱連盟理事長として活躍された藤井知昭氏が1998年に退任された後、高須道夫氏が理事長に就任、長谷さんは副理事長として高須氏を支え、活動の中心を担った。高須理事長は5年ほどで退任されたため、その後を引き継いで理事長に就任した。

藤井氏が理事長を務めた30年の期間にコンクール、合唱祭、各種の講習会、年末の名古屋フィルハ

一モニー交響楽団との第九演奏会など充実した活動が展開された。特に愛知県合唱連盟は設立当初の1962年から名古屋フィルハーモニー交響楽団の前身である名古屋オーケストラ連盟とともに第九を演奏しており、現在もこの活動は続いている。20年前からは連盟内でオーディションを行い、合格しないと出演できないという厳しいものになっているため、この地域のトッププロオーケストラとの共演演奏団体として恥ずかしくない演奏を目指し、今日に至っている。それらの活動は完成度も高く、人材にも恵まれて組織は順調に受け継がれてきた。全国組織である全日本合唱連盟の活動に合わせて行事も増え、加盟団体も増加し続けている。主催するコンクールや合唱祭は当初の1日での会期では収まりきらず、2日間の開催となり、アンサンブルコンテストにいたっては3日間に渡って開催。長谷さんは、このように活動を充実させつつ、時代に合わせて柔軟に改革し続けることで継続させていくスタイルを大切にしている。

なお、2011年には愛知県芸術劇場コンサートホールにて愛知県合唱連盟の設立50周年記念コンサートを開催した。指揮に関西フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者の藤岡幸雄氏を招き、名古屋フィルハーモニー交響楽団の演奏により、総勢620名に及ぶ合唱団員が参加するビッグプロジェクトであった。目玉の演奏は名古屋出身の作曲家新実徳英氏に作曲を委嘱した『いつまでも いつまでも』のオーケストラ版初演であった。大きな節目のプロジェクトを成功させた長谷さんの功績は、愛知県合唱連盟の歴史に記録されることだろう。

子どもの合唱について

NHK全国合唱コンクールやCBCこども音楽コンクールでは小学生部門があったが、全日本合唱コンクールでは、19年度からいよいよ小学生部門が始まる。学校の現場ではコンクールなどの競争の場を利用して、上達を図るという方法がとられやすい。コンクールで良い成績を収めるという分かりやすい目標があることが励みになるからである。宗教曲をはじめ抽象的で技術的に難易度の高い曲に取り組む場合も少なくない。こうした手法が子どもの音

楽を育むために適切かどうかは難しい問題であろうが、長谷さんは、「児童合唱団で良い成績を収める団体は指導者の力量によるところが大きい。でもそれはスパルタ指導ということではなく、いかに子どもたちに寄り添えるかが大きいのです」と語る。また「日本の合唱曲は、その言葉の意味を子どもたちが理解して歌っている団体がやはり好成績を収めています」とのこと。子どもの音楽性や音楽を愛する気持ちを伸ばすということを大切にされた長谷さんならではの視点だと痛感させられた。

これからの愛知の合唱界に望むこと

愛知県合唱連盟の理事長を退任したとはいえ、長谷さんの愛知の合唱界への貢献は多岐に渡っている。ノース・エコーのほか、名古屋市民コーラスの常任指揮者としてオーケストラ作品の合唱指導を行い、パティオ・シアター合唱団、Coro Chiaraの指揮者も長年にわたり務めるなど、アマチュアコーラスの育成に力を注ぎ、相変わらず忙しい日々を送っている。インタビューの締めくくりに、長谷さんにこれからの愛知の合唱界に望むことを伺った。「たくさんの方に合唱をしていただき、良い合唱に触れていただく。良いものを聴けば良いとわかりますし、参加することで合唱の良さを幅広く味わってほしいと思います。そのためにも参加する場所が少しでも多くあると良いなと思っています。いろんなところで機会をつくって、歌ってもらおう。そして何よりも音楽が好きで音楽を心から楽しむというところに到達すれば、それが一番良いことですね」と長谷さんは優しい笑顔で語られた。



団員数200名を超える「名古屋市民コーラス」

ピックアップ



2017年の「なごやっ子読書ノート」

本との出会いを演出する図書館の歴史

鶴舞公園に市民の念願だった市立名古屋図書館が開館したのは、関東大震災が起きた翌月、1923(大正12)年10月1日。この市立名古屋図書館では開館したときから、児童へのサービスが積極的に行われてきました。定員84人の児童室は満席のことが多く、入れ替え制で利用してもらうこともあったといいます。開館の年の12月16日には「第1回お話の会」が開かれました。お伽噺や動物の鳴き声、手品など多彩なプログラムが準備されました。昭和の初めの子どもたちも、図書館でお話を聴いていたのです。いまでは、「おはなし会」は乳幼児向けが大人気。手あそび、わらべうた、絵本、紙芝居と親子で楽しめる工夫がされています。



1923年に開館した市立名古屋図書館

大正時代にはもう一つ図書館が開館しました。矢田績(やだせき)氏が私財を投じて東区武平町に設立した財団法人名古屋公衆図書館です。矢田氏は銀行勤務時代に約10年間名古屋支店長を務め、退職後は、これから発展する町と見込んだ名古屋に居を移し、市民の読書の機運を高めたいと図書館設立にいたります。名古屋公衆図書館は1939年に名古屋市に寄付されます。



1925年に開館した財団法人名古屋公衆図書館

1941年、日本が太平洋戦争に突入。市立名古屋公衆図書館は1945年2月19日に空襲を受けますが、職員の必死の消火活動により焼失を免れます。戦後、1952年に名古屋市栄図書館と改称、1965年には名古屋市西図

書館として移転改称し、平成6年には新築され、現在の建物になりました。一方、市立名古屋図書館は、1945年3月19日の名古屋大空襲により焼失。しかし、こちらでも職員は懸命に消火作業に務め、一部の蔵書は焼失を免れました。そして、驚くべきことに、焼け残った部屋で同年8月1日から館外貸し出しを再開。2週間後には終戦。翌1946年5月にバラック建ての閲覧室が増設され、市民が小さな閲覧室に殺到したといいます。その後、本館が再建され「名古屋市鶴舞図書館」となったのは、1952年8月のことです。

現在、図書館では本との出会いを演出するために、さまざまな企画が立てられています。本についてわからないことがあれば「ほんシェルジュ」の腕章を付けた人にたずねることができます。夏休み前には小学生に「なごやっ子読書ノート」が配布され、図書館に持って行くとシールがもらえます。感想ページを書き終えたノートを持って行くと記念品がもらえたり、図書館のお仕事体験の応募ができたりします。2012年からはじまった「名古屋なんでも調査団」も好評です。「名古屋にミンミンゼミはいないの?」「鶴舞公園にトラがいたって本当?」「名古屋から富士山は見えますか?」……。市民から寄せられたこうした疑問などについて調査し、出典も入れて報告書をまとめています。現在、64の調査報告書がホームページ上で閲覧できます。『愛知県の昆虫 上』『富士見』の謎』など、出典としてあがっている本も興味深く、今後の読書に役立ちそうです。

図書館に並ぶ本は時代とともに変わっても、図書館が本との出会いの場であることは開館当時から変わりません。近くの図書館で本との素敵な出会いを体験してみませんか。(Y)



市立名古屋図書館開館当時から腕章は使われていた

参考文献
 名古屋市鶴舞中央図書館七十年史 1923~1993 名古屋市鶴舞中央図書館
 西図書館50年誌 名古屋市西図書館
 取材協力
 名古屋市鶴舞中央図書館

いとしの サブカル

街歩きの新たな楽しみ 「渋ビル鑑賞」のススメ

名古屋渋ビル研究会

てらしま りさと
寺嶋 梨里

建築会社に勤めるグラフィックデザイナー。大学時代の同級生で建築家の^{うぶ}諷口志保とともに名古屋の古いビルを愛でるユニット「名古屋渋ビル研究会」を結成。渋いビルの魅力を少しずつ広げる活動をしている。

角が丸い窓、色むらのあるタイル、しゃくれ上がった庇…。街を歩いていると、ちょっと気になる古いビルに遭遇することがあります。1950～70年代、高度成長期に建てられた一見地味なビル。でも、よく見ると作り手やオーナーのこだわりが見え隠れする味わい深いビル。私たちはそれを「渋ビル」と呼んで愛で、記録する活動をしています。

渋ビルを鑑賞する主なポイントは「水平連続窓」「角丸窓」「タイル」「庇」。かつて世界中の建築シーンを席卷したモダニズム建築のスタイルが、地場の設計者や産業と結びついて土着化したものと考えられています。今見ると懐かしいそのデザインは、当時の流行最先端だったわけです。

角丸モチーフは当時のグラフィックやプロダクトデザインでも大流行。角丸窓はスチールサッシからアルミサッシの移行期に、もともと鉄道などの車両用アルミサッシを製造していたメーカーが建築業界に参入したこともあって、多用されるようになりました。



ワダコーヒービル

色むらが美しいタイルは、建物を水と汚れから守るため、オシャレのためなどに貼り付けられており、色と質感、そして貼り方の工夫でビルの個性を演出しています。渋ビル時代のタイルは手作りの味わいがたっぷり。現在の品質が統一されたタイルにはない魅力があります。

ランダムに配置された窓と色むらタイル、しゃくれ上がった庇が一際目を引く中産連ビルは、ル・コルビュジェに師事した建築家の一人、坂倉準三氏が手がけたモダニズム建築の隠れた名作。名古屋の渋ビル界の名作でもあります。

中産連ビルもそうですが、渋ビルは大通りではなくちょっとだけ奥に入った路地にひっそりと建っています。というのも、大通り沿いは開発が進んで新しいビルになってしまっているから。渋ビルたちは築40～50年を迎え、老朽化や開発のために建て替えが進んでいるのです。中日ビルや丸栄などの有名どころのビルも間もなく解体されます。無名ながら珠玉の魅力を放っていたお気に入りのビルも、気づけば解体されていました。

いつもの景色はいつまでも残っているわけではないので、私たちはせめて愛するビルの姿を写真に撮り、目一杯褒めてあげて、『名古屋渋ビル手帖』という小冊子にまとめて記録しています。2012年に創刊準備号を発行してから毎年1冊ずつ、現在6冊目になりました。

渋ビル手帖を片手に街を歩いてみませんか？ 渋ビルの魅力を知れば、見慣れた景色がもっと愛おしく映るはずですよ。



中産連ビル



名古屋市文化基金
Nagoya Culture Fund

なごやの文化を褒められると、うれしい。

文化事業への寄附金を活用し 創造性と都市の魅力を高める 文化力によるまちづくりを目指しています。

支援と育成

芸術や文化活動の支援と育成をしています。

参加と交流

みなさまが参加し交流できる事業を展開しています。

芸術の鑑賞

文化や芸術のご紹介や鑑賞をしています。

情報の発信

さまざまな芸術や文化の情報を発信しています。

ご寄附の際は、インターネットを利用したクレジット決済(クレジット寄附)もご利用いただけます。

ご寄附のお問い合わせ | ご寄附は、いつでも受け付けております。



名古屋市文化基金 Eメールアドレス
a3172@kankobunkakoryu.city.nagoya.lg.jp



名古屋市観光文化交流局
文化歴史まちづくり部文化振興室
TEL: 052-972-3172



公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
TEL: 052-249-9390

税の控除について | この寄附金は、ふるさと納税の対象です。

○個人の場合 | 確定申告によって、以下の金額を所得税及び個人住民税から控除することができます。

所得税(所得控除)

寄付金額
又は
総所得の40%
のいずれか低い金額
○ 2千円
⊖ 寄付金控除額

*特例控除額 = (寄付金額 - 2千円) × (100% - 10% (基本分) - 所得税率)

個人住民税(税額控除)

寄付金額
又は
総所得の30%
のいずれか低い金額
○ 2千円
⊗ 10% ⊕ 特別控除額
⊖ 寄付金税額控除額

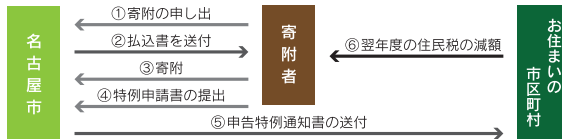
※所得税率は復興特別所得税を含めた率 [注意] 特別控除額は、所得割額の2割を限度とします。



○法人の場合 | 寄附された金額を法人税法(第37条第3項第1号)の規定により損金算入することができます。

「ふるさと納税ワンストップ特例制度」をご利用いただけます。

ふるさと納税をした翌年に確定申告を行うことが必要です。ただし平成27年4月1日以降は、寄附時に「ふるさと納税ワンストップ特例制度」の申請をしていただくことで、確定申告をしなくても控除を受けられるようになりました。(特例制度は、給与所得者等の方で、確定申告の必要がない方、寄附先の都道府県及び市区町村が5団体以下の方に適用されます) ※確定申告には、この寄附金の領収書が必要となりますので、大切に保管してください



詳しくは、市公式サイト内 [名古屋市文化基金](#) [検索](#)



環境にやさしい企業を目指します



わたしたちの会社ではISO14001を取得、印刷にかかわる制作から配送まで、トータルで環境にやさしいシステムを構築、環境負荷低減印刷を目指します。



中日高速オフセット印刷株式会社
〒462-0847 名古屋市中区金城四丁目3番19号
TEL (052) 914-1711 FAX (052) 914-7913
<http://www.c-offset.co.jp>



舞台VTR映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン.ビデオ.システム
TEL (052) 896-2256 FAX (052) 896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。



◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・舞踊・音楽公演・ホール、DM等にて配布

MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒461-0004 愛知県名古屋市中区栄2-11-22 アバンテージュ葵305
TEL (052) 508-5095 FAX (052) 508-5097 URL <http://www.mane-pro.com>

業務内容

- ① 舞台の企画・制作マネージメント
- ② イベントの企画制作
- ③ 芸術団体のコンサルティング
- ④ 舞台・イベントの運営

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

20Hz ← → 20kHz



舞台音響・映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909